

## 両大戦間における生活改善思想の形成と展開（第4報）

- 『結婚』に対する意識 -

○岡部千鶴\* 奥田都子\*\*（\*久留米信愛女学院短大，\*\*共立女大）

【目的】本研究は、「生活」研究の気運が高まりつつあった第一次世界大戦後の我が国において、広く提唱された生活改善思想と、その実践である生活改善運動の分析を通じて、両大戦間の「生活」概念や問題意識を明らかにし、「生活の学」としての「家政学」概念の再構築に資することを目的とする。本報告では、生活改善をめぐる言説の中でも「結婚」に関する記述に着目し、当時の社会的背景と関わらせながら考察する。

【方法】生活改善運動に関する当時の文献資料に基づき、家庭生活・家庭経営に関する記述を抽出し、提唱された「結婚の改善」について考察を試みた。

【結果】①結婚に関する記述は、生活改善同盟会から発表された調査決定事項において、「社交儀礼」項目に分類されている。②提唱された事項は、「婚約前の健康診断書の交換」「婚約前の十分な交際」「年収三割以下の結婚費」「挙式と同日の入籍」「簡略な披露宴」「新婦色直しの廃止」などの現実的かつ具体的な内容であり、「結婚」の理念についてはほとんど述べられていない。③これは、家中心の結婚から相互の人格中心の結婚が望ましいとされながらも、そのような結婚を作り上げるためには、まず、虚飾の廃止が急務であると認識されたからであり、実践を通じた意識改革が意図されたためと思われる。④しかし、こうした提言は運動が展開されるにつれ、その『技術』面だけが奨励された感が強く、意識の改革までには至らなかったといえる。⑤これは、当時の社会的状況、すなわち、国力の増進を目指した倹約貯蓄が主張され、金銭及び時間の節約を目的とした合理的単純性の追求が生活改善運動の主流となったことと大きく関係している。